

外交官、色摩力夫著「オルテガ、現代文明論の先駆者」中公新書、1988年9月15日刊を読む

エリートとは何かを考える

本書を読み、QandAの形で、オルテガ(1883年～1955年)の「エリート」についての考えをまとめてみました。学習塾・予備校・進学校で「エリート教育」を目指す先生方にとって、オルテガの「大衆の反逆」は必読書と考えます。(林明夫)

Q:「国家」の形成はどのように行われるのでしょうか。

A:「国家」特に、近代の「国民国家」は、本来、異質の、いくつかの地域集団が、ある一つの「国民的共同プロジェクト」に共鳴。相互に、「国民としての連帯感」が芽生えることによって、形成されます。

Q:では、「国家」はどのように解体されるのでしょうか。国家解体の「病理(病気の原因)」は何でしょうか。

A:(1)「国民的連帯」が失われるためです。

(2)ある一つの「国民的プロジェクト」に共鳴し、相互に、「国民としての連帯」が芽生えることによって「国民国家」を形成した、本来、異質の地域集団が、「心理的に分裂」する傾向を示すためです。

(3)①これを「割拠主義」と呼びます。「地域的割拠主義」は、「特定地域」の「分裂運動」を意味します。

②「軍部によるクーデター」は、「職業的集団の割拠主義」の一つの例です。

③「戦闘的な労働運動」は、ややもすれば、「階級的な割拠主義」に陥る恐れがあります。

Q:「割拠主義」の具体的なやり方、政策手段は何ですか。

A:(1)「直接行動」です。

(2)「説得」によって「国民的コンセンサス」を得る「努力」を、初めから「放棄」するのが、「軍事クーデター」などの、「割拠主義」です。

(3)「割拠主義」は、「実力による目的達成」を「公然と志向」することです。

Q:それではお聞きします。「国民国家」形成の「核心」をなす、「国民的プロジェクト」は、誰が提示するのですか。これは、自然発生的に生まれることはあり得ないですね。

A:(1)それは、「エリート」の「役割」です。「特別の才能のある者の使命」です。

(2)もしそのプロジェクトが、十分、魅力のあるものであれば、「大衆」はこれに「共鳴」し、「行動を共にする」でしょう。いかなる「社会」も、「少数の優れた者」と、「多数の大衆」から成り立ちます。それが「社会の本質」だからです。

(3)「社会の健全性」は、その構造が、いかに明確に保たれているかによります。現在スペインの「病理(病気の原因)」は、「組織され訓練されたエリートの不在」、そして、「割拠主義」です。

Q：そのような「エリート」はどこにいるのですか。

A：(1)①「労働者階級」の中にも「エリート」は存在します。

②逆に、「指導者階級」「知識階級」の中にも「大衆人」は、少なからず、存在します。

③つまり、「エリート」と「大衆」は、「心理的事実」であって、「意識の問題」に他なりません。

(2)①例えば、「科学者」や「専門家」は、ある特定の狭い分野では、優れた才能を持ち、優れた業績を示しているかもしれません。

②しかし、「その他の分野」は「無知」でありながら、「人生や、社会一般」について、「権威のある者」のように「発言」します。

③現代社会は、それを、当然のこととして受け入れ少しも怪しまない。

(3)「科学者」やある特定分野の「専門家」は、まさに、「無知な賢者」といえます。典型的な「大衆人」なのです。

Q：「文明」とは何ですか。

A：(1)「文明」とは「人工物(人によってつくられたもの)」です。

(2)「文明」には、「過去における歴大な努力の体系」が不可欠です。

(3)①したがって、「文明を維持するだけでも、少なくとも、それと同等の努力の体系」が必要です。

②さもないければ、「文明」は「崩壊」することは必至です。

③まして、「文明」をさらに発展させようとするならば、それを上回る「努力の体系」を構築しなければなりません。

Q：われわれの責務は何ですか。

A：(1)①われわれには、「現に達成された文明を維持し、発展させる責務」があります。

②なぜか。さもないければ、人類は生き残ることができないからです。

③文明を維持し、発展せしめる第一級の「技術」は何か。それは、「歴史」です。

(2)①今日、「最も教養ある人々」が、信じられないほど

②「歴史の無知」に侵されています。

③「現代の危機を理解し、それに有効に対処するために、先例を探る。

(3)それは、今や終了しつつある近代文明に先立つ、ルネッサンス期に現れた危機、それから、ギリシャ・ローマの古代社会の崩壊、すなわち、ローマ帝国の前後に現れた危機の二つです。

Q：改めてお聞きします。「大衆」とは何ですか。「エリート」とは何ですか。

A：(1)①「大衆」とは、「皆と同じ」と感じ、それで不安を感じることなく、他人と同じと感じる人のことです。

②「大衆」とは、平均人、「大衆」とは自らを大衆と感じる人です。

③「大衆」とは、このような「心理的事実」をいいます。

(2)①「エリート」も、同様です。「エリート」は、「自らをエリートと意識する人」です。

②「エリート」とは、特定の職業などとは違います。鼻持ちならないスnobではありません。

○「エリート」とは、「断れば、断ることのできる、特別の社会的責務を、あえて受諾する人」のことです。

(3)①したがってここに、「大衆」と「エリート」の二つの人間のタイプがあります。

②このような社会の分化は、「人間の種類」によるものであって、特定の職業などによるものではありません。

③様々な人の中に、「大衆」と「エリート」が存在します。

(4)①すべての社会、すべての組織には、「独特の使命感」を持つ「エリート」が必ず存在します。

そうでなければ、社会や組織は崩壊しています。

②また、何の使命感を持たない「大衆」も少なからず存在します。

③このように、社会や組織は、「エリート」と「大衆」との有機的な構成により成立しています。

Q：改めてお聞きします。「文明」とは何ですか。「文明」を維持、発展させるために「エリート」の果たすべき役割は何ですか。

A：(1)①「文明」とは、人々がつくった「人工物」です。「文明」には、それをつくった人が、必ず、存在します。

②「文明」をつくったのは神様ではありません。

③「自然」は放置しておいても、永遠にそこにありますが、「文明」は放置されれば、たちまち崩壊します。

(2)①「文明」を創造するには、人間の歴大な組織力を必要とします。

②しかも、いったん創造された文明を維持し、管理するためにも、やはり同様に、歴大な組織的努力が必要です。

③ただし、「創造する才能」と「維持する才能」は異質のものです。

(3)①しかし、「維持する努力」は「創造する努力」と、少なくとも同等、あるいは、それ以上の分量を必要とすることを忘れてはならない。

②まして、さらに、「進歩を計る」には、「気が遠くなるような努力の体系」を必要とする。

③これが、「文明の原則」です。

(4)①「大衆人」は、この「文明の原則」を知らない。

②「大衆人」は、「文明の果実」は「自然の果実」と同じように「勝手に享受」するが、「それを可能にした人間の努力」には感謝しない。

③ここに、「大衆人」の「文明」に対する「根本的忘恩」がある。

(5)①「エリート」は、「常に、自分自身を、上級の規範」に訴える必要を感じている。

②これを、「高貴なる生」、「規律としての生」と呼びます。

③「高貴性」は「自らへの要求」により、「受諾する義務」により「定義」され、その「権利」によるものではありません。(何が「高貴なる生」であるかは、その人が、自分自身のミッションとして受諾する「国民的プロジェクト」の内容によって決まります)

(6)①それが、「noblesse・obligé」です。

②彼ら、「エリート」にとって、「生きること」は「永遠の緊張」であり、「間断なき訓練」です。

(7)①これに対して、「大衆人」は、「通俗の生」「惰性としての生」を生きる。

②「大衆人」は「環境に烈しく強制」されない限り、自分以外の何ものにも審判を求めない。

③「自分を訴える規範」など認めない。自らをその生命の主権者と感ずる。

○ここから、「大衆人」の「自己閉鎖症」「不従順性」が生まれる。

<コメント>

小室直樹・色摩力夫著「人にはなぜ教育が必要なのか」総合法令、1997年11月25日刊を読み、色摩大使が、スペインの思想家「オルテガ・イ・ガセット」を30年かけて読み込んでいることを知り、遅ればせながら、本書、色摩力夫著「オルテガ、現代文明論の先駆者」中公新書を読むに至りました。もっと早い時期に本書に出会っていたら、オルテガの代表作、「大衆の反逆」岩波文庫を、よく理解できたものと考えます。何事にも、「案内人」は大切と痛感します。進学塾で「エリート教育」を目指す先生は、本書や、オルテガの「大衆の反逆」(岩波文庫など)で、「エリート」とは何かを学び、塾生指導に御活用いただきたく思います。オルテガの「文明」論は、国家のレベルだけでなく、ありとあらゆる企業や団体、事業所にも当てはまると考えます。「国家」を「企業」や「団体」、「自分の職場」と読み替えれば、そのすべての「エリート」が存在しなければ、「組織は崩壊」することが、簡単に想像できます。オルテガの提起した「文明論」「エリート論」は、「組織論」「リーダーシップ論」として、現代に生きています。是非、「大衆の反逆」にご挑戦ください。

2025年1月30日(木)